



TITLE:

<大會抄録>米芾小論

AUTHOR(S):

杉村, 邦彦

CITATION:

杉村, 邦彦. <大會抄録>米芾小論. 東洋史研究 1975, 34(3): 453-454

ISSUE DATE:

1975-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153588>

RIGHT:

財」を政治の目標とした。君主獨裁權を行使する場合に、「朋黨」は尤も危険な存在であり、それを防止するために「用人」を重視した。ここから雍正帝が朋黨發生の基盤となりやすい科舉官僚の動向を警戒し、また督撫權力の擴大に寄與する思想への彈壓も行っていることに注意する必要がある。次に公權を利用しての諸々の私財蓄積の罪がある。官僚は皇帝の名代として「理財」の義務が課せられていたが、その制度の盲點を利用して私利・私欲を追求した。その場合官僚の家計を擔う家人が重要な役割を果している。年羹堯は多數の家人をかかえ私的事業を經營し暴利を圖った。ただその蓄積した財は各地に寄匿している。年羹堯蓄財の意圖は不明であるが、これが獨裁權力を脅やかすものとなった以上、斷罪の對象となったのである。

フランス植民地政權のベトナム村落への關與の

一形態——植民型開墾（コンセション）設定について——

吉澤 南

一、目次

- (1) フランス植民地政權とベトナム村落との關係の把握について
- (2) 開墾申請者——小集團開墾政策の意味
- (3) 開墾地
- (4) 植民地政權——《恩人》——入植戶の關係
- (5) 永久開墾における土地分配規定——「公土」導入の意味

1、史料——Backy Bao-Ho, Quoc-Ngu Cong Bao 1936~41（北圻保護『國語公報』）中の、一九三六年三月二〇日付の四つの文章。①移民によるコンセション開墾の規則をもうける決定。②移民による期限つき開墾地にたいする郷約の様式。③保證書。④移民のためにコンセションを分給する規則に關する通達。

三、報告要旨——新田の開墾＝植民型開墾（コンセション）設定は、植民地政權による既存の村落共同體的諸關係の否定ではなく、その再編維持をめざしていた。小集團開墾に政策の力點があつたこと（時には分村の形態をとる）、開墾申請者（恩人）と入植戶との關係（郷約によつて律せられる）は、上からの擬似的な村落共同體規制の性格をもつていたこと、十五年間の開墾期をすぎ土地所有權が確立する段階で「公土」（村落共地）の導入が構想されていたこと、を明らかにする。したがって、ベトナム民族解放主體（農民）は、村落共同體によつて育てられた結合力に依據して鬭争したとの評價は一面のであり、植民地政權による共同的諸關係を利用した村落再編と對決しなければならなかつたのである。

米芾 小論

杉村 邦彦

蘇軾、黃庭堅、米芾は、宋代の藝苑を代表する三人の巨匠である。このうち蘇軾と黃庭堅は、なお表向きは政界の人であつた。二人とも黨争の渦中であつて、官途は不遇であつたとはいえ、一時は

中央政界に樞要なポストを占めた官僚である。しかし米芾は晩年でこそ書畫學博士の稱號をもらったが、本來官吏としては失格者に近く、自らもその活動の場を翰墨の世界に限った。外に發しては天馬空を行くような型破りの奇行となったが、内に沈んでは、書の實作においてまた研究において、熱烈な古法の探求者でもあった。それ故にこそ、彼は中國における最初の最も藝術家らしい藝術家になることができたと考えられる。

政治や社會という窮屈なわけにはどうもはまりきれない所があるが、藝術を至上のものと考え、それを實踐することにおいて誰よりも純粹にかつ大膽になることのできた稀有の人物であった。これはおそらく彼以前には見ることでない新しいタイプの人間であり、ここに彼が近世の藝術史に占める大きな意義を見出すことができる。

米芾の祖先が西域「米國」からの歸化人であつたろうという説は、早く桑原隲藏博士によって唱えられた。米芾が生涯を通じて政治の表面に立たず、ひたすら翰墨の世界に身を沈めていったのも、そのような自己の出自に關する屈折した意識が、そのことをいさう促したのではなからうか。

今回の發表は、主として米芾の人と書を關連づけながら論じてみたい。また翁方綱の「米海岳年譜」の遺漏を補ったより詳しい年譜を當日配布する豫定である。

漢代皇帝支配の原理

好 並 隆 司

漢代における皇帝の人民支配にとつて、二十等爵制の占める意味の大きいことは既に西嶋定生氏によつて明らかにされている。その爵制は一面で、商鞅の軍功爵を繼承するものと考えられるから、この點を検討すると、知行制の面と官僚制の面とが、内在しており、漢初その矛盾が「功」の意味概念を擴大していった。そして後者の優位が明らかになるにつれ、基本的には田宅授與制は解消していく。しかしながら、爵に伴う田宅保有の考えは士大夫層の觀念に残り、吏民私有田の枠内の許容の原理となつたと思われる。前漢末、限田制の基準はおそらく爵制に伴うこの觀念の再現であらう。

右の報告趣旨を、漢代の徙陵邑による皇帝の齊民支配を介して説明するとともに、爵制的限田制が大凡如何なる標準をもつていたかを復原する作業の一端を明らかにしたい。

ブリヤートのラマ教

若 松 寛

ブリヤート族が帝制ロシア時代熱烈なラマ教徒であつたことは、我國でもよく知られているが、その實態については未だ十分に研究されていないようである。私はブリヤートのラマ教に關し、特にそ